

与謝野晶子の児童文学をめぐる

実川 恵子

一

恋と歌に生きた「情熱の歌人」として、また「明星」の代表的女流歌人として名声の高い与謝野晶子に、子供のための児童文学の業績のあることを知る人はそう多くはないと思う。それは、従来「歌人」としての晶子像の賞揚に固執しすぎ、社会評論家としてや、児童文学としての側面のある事実を見落していることによるものと思われる。本稿では、社会評論家の面は措き、児童文学的な業績について、考えてみようと思う。

この、児童文学者としての晶子像に触れた論は、以下に掲げるようにそう多くはない。まず、最初に論じたのが、上笹一郎氏「与謝野晶子の『少年少女』」（『本の本』昭和五年八月号）、続いて逸見久美氏「与謝野晶子解説（与謝野晶子の児童文学）」（『日本児童文学大系』第六卷・昭和五年十一月）である。また、この両者を踏まえた佐藤通雅氏『日本児童文学の成立序説』（大和書房刊・昭和五六年十一月）所収、第三章「与謝野晶子」の項と、再び論じた上笹一郎氏「晶子その児童文化的側面（上）」（『日本児童文学』昭和五年五月）である。

児童文学者としての晶子の仕事は、初めて童話を発表した明治四十年六月より、大正十一年五月頃迄の十五年間に行なわれている。鳥越信編の「講座日本児童文学」別巻『日本児童文学史年表1』等

を参照しながら、最初にこの時期の児童文学史の概要を辿ってみようと思う。

女流の児童文学者の先駆者、若松賤子が明治二九年二月に他界した後、女流児童文学者は誕生せず、空白期を迎えることになる。それからおよそ十年後に、児童文学者としての晶子の活躍が始まる。

この同じ時期に唯一活躍した女流作家には尾島菊子がいる。この一方、男性作家では、巖谷小波・泉鏡花・田山花袋・山田美妙らが活躍している。しかし、この頃の手段と化していき、文学としての自立を果さなかつたようである。このような中で、女子教育の普及と相俟って、女子対象の雑誌が次々に誕生していった。明治三五年四月には、「少女界」、三九年九月「少女世界」、四一年二月に「少女の友」、四五年一月に「少女画報」が刊行された。これらの雑誌の需要に迫られ、童話執筆の機会を得たのが晶子である。

こうして執筆された児童文学は、次に掲げる五冊の単行本と、雑誌等に発表された童話や少女小説である。単行本を発行年順に列挙すると、

- 1 『絵本お伽噺』（明治四一年一月・祐文社）
- 2 『おとぎばなし少年少女』（明治四三年九月・博文館）
- 3 『八つの夜』（大正三年六月・実業之日本社）
- 4 『うねうね川』（大正六年九月・啓成社）

5 『行って参ります』（大正八年五月・天佑社）、後に『藤太郎の旅』と改題し、昭和四年一月、朝日書房より刊行。

この五冊のうち、『八つの夜』、『うねうね川』、『行って参ります』の三編は長編童話で、『おとぎばなし少年少女』は二七篇（金ちゃん螢・女の大將・燕はどこへいた・鶯の先生・金魚のお使い・お化けうさぎ・虫の病院・お留守番・山遊び・ニコライと文ちゃん・虫の音会・螢のお見舞・紅葉の子供・芳子の虫歯・伯母さんの襟巻・蛙の舟・美代子と文ちゃん・贈りもの・ほととぎす笛・こけ子とこっ子・文ちゃんの朝鮮行・衣裳持の鈴子さん・うなぎ婆さん・三匹の犬日記・赤い花・鬼の子供・早口）の短編童話から成る童話集である。これらは、『定本典謝野晶子全集』第十二卷（昭和五六年三月、講談社刊）、『名著復刻日本児童文学館』第二集に所収されており、容易に読むことができる。なお、もう一編の『絵本お伽噺』は、現存しない幻の書物ということである。入江春行氏『与謝野晶子書誌』（昭和三十一年・創元社）によれば、「子息等の為に作ったお伽噺の中から、『牛のお爺さん』、『羽の生えた話』の二編をとって一冊とせしめる。小林鍾吉・岡野栄の挿画あり」とのことである。この五冊の単行本刊行数は、有島武郎の『一房の葡萄』のみ、芥川龍之介も同じく一冊の童話集『三つの宝』の刊行と比べると、目を目はるものがある。

晶子の童話や少女小説はいつたいどれほどあるのだろうか。この五冊の単行本の他に、雑誌に発表した作品がある。その雑誌執筆の状況を把握するため、前掲の鳥越編『児童文学史年表¹⁾』によって、作品を年代順にぬき出し、整理した表を掲げた。

この表から明らかなように、雑誌掲載の作品だけを見ても、その執筆の状況は総数七九編という驚くべき数にのぼる。このうち『おとぎばなし少年少女』に収録された二七編を除くと、五三編になる。

初めて童話を発表した明治四十年六月から、翌四一年には七編、四二年は毎月発表の十二編、四三、四四年には最多数の十三編が執筆されている。この翌年の大正元年は夫、寛の後を追ひ、四から十一月までパリに行ったためか、二編と減少するが、二年後には再び十二編の発表となっている。このように十編以上の執筆は、この年迄で、これ以降は徐々に少なくなり、大正三、四年に『八つの夜』、『うねうね川』の長編童話が刊行されている。

以上のように、晶子が数多くの童話や少女小説を執筆した明治四十年から大正六年にかけては、いわゆる児童文化ルネッサンス期の到来前に当たり、大正七年には、日本の近代児童文学の歴史を拓いた鈴木三重吉主宰の雑誌『赤い鳥』が創刊されている。こうした本格的な児童文学到来の前段階として、この時期を見ると晶子の多くの童話執筆は、あながち見過すことはできないのではないだろうか。

二

晶子の児童文学作品には、短編と長編のものがある。比較的早い時期に書かれたものは、ほとんどが短編で、その内容は日常生活を題材にした子供のために書きたいわゆる「生活童話」と呼ばれる作品が大部分である。これらの童話を収録した『おとぎばなし少年少女』の「はしがき」に、晶子は童話創作の動機を次のように述べている。

「自分の二人の男の子と二人の女の児が大きく成って行くに従って」「何かお伽噺の本を買って読んで聞かせるやうに致して居りましたが、それらのお伽噺には、仇打とか、泥坊とか、金銭に関した事とかを書いた物が混ってゐたり、又言葉づかひが野

卑であったり、又あまりに教訓がかった事を露骨に書いてあって、児共をのんびりと清く素直に育てよう、潤く大きく樂天的に育てようと考へてゐる私の心持に合はないものが多い所から、近年は出来るだけ自分でお伽噺を作つて話して聞かせる事に致して居ります」

この「はしがき」から解かるように、晶子は「教訓がかった」ものを否定し、広くおほかで、愛情豊かな童話を願う母親の見解で童話を執筆したことが語られている。

その晶子が、児童文学作品を初めて発表したのは、明治四十年六月、「少女世界」に掲載した「金魚のお使い」という作品である。この童話は、主人公の太郎が三匹の金魚を駿河台の菊雄さんの許へお使いにやるその行程を描いたものである。金魚が、電車に乗つてお使いに出るといふ擬人法を用いた筆法は、漸新で新鮮味があり、ユーモラスでもある。

この作品の一場面に、三匹の金魚がお使いに出、駅で切符を買う部分がある。手のない金魚には切符は売れないと言う駅夫に、三匹の金魚の独言などは喜んで、拒否した駅員はいとも簡単に「乗つても宣しい」と許可するのである。このようなやりとりで読者は不自然さを抱くが、推測するにこの場面は金魚がお使いに出るといふ子供側から見ると、夢の世界に誘われていく期待でいっぱいになつたに違いない。そうした幼い子供達の母親としての感性によつて、こうした場面での説明の執拗さは極力排除したのではなからうか。

また、この童話の主眼である水を必要とする金魚の習性に対して、駅長と駅夫が奔走して、三匹の金魚を金盥に入れる迄の金魚と人間の会話には、豊かな愛情と、目を輝かせている幼い児らの純粹な問いにやさしく答えようとする母親晶子の語らいが感じられる。また、日常生活の身近かな出来事を題材に、現実の人名や地名を

折りこむことによつて、子供らの興味を引こうとした点などがこの童話の主眼なのである。この童話の結果は、お使いを終えた金魚を二人の子供が金盥を持つて駅まで迎えに行くという件りになつており、人間のこのころのあり方や、智恵を身を持つて教えるよとする晶子の精神がこの「金魚のお使い」に一貫して流れているように思えるのである。ちなみに、この頃晶子は三十歳、二男二女をもうけている。

晶子は、その後次々と童話を発表していくが、次男の茂を登場させて、近々幼稚園へ行く頃の日常的なことがらを愛らしい会話を中心に描いた「ぼんぼんさん」(「詩人」三号・明治四十年八月)は、現実的な生活を覗かせる作品である。この童話は二頁足らずの短いものだが、その終わりに次のような描写の部分がある。

四時頃母さんが湯に入つて居ると、人が来て居ると云ふ、其の人は字を書いて居ると分らぬ事を絹やが云ふて来た。雑誌社の方が何か話しに来て居れるかと思つて居たが、違った。お父さんの書物棚から、八峯七瀬の乳母車などにまで書いたものを貼つて居た。

おそらく、ここに描かれたのは、借金取りか、執行官のことであろうか。この頃の与謝野家の生活は、貧窮しており、その経済を支えるために晶子の童話執筆は大きな糧となつたらしい。

この他にも、晶子の童話には、現実の生活に即したりアルな作品がいくつもある。「金ちゃん蟹」・「ニコライと文ちゃん」・「お留守番」等がそれである。その中でも「お留守番」は、父母が外出したあと、三人の兄弟が留守番をする話である。しだいに退屈になり、太郎が、「姉さん行きましよう。動物園へ。」といつと、「いけない。いけない。」と大時計が言う。時計は、部屋の中で動物が見られるようにと、神様にお願ひする。すると、洋服が熊になり、花瓶の花が

おしどりになり、ピアノがらくだになるといった具合に次々に動物に化していく。その変化の様がこの「お留守番」のおもしろいところである。このような種の発想の例は、この他にも数例がある。

以上、述べたように、「小年少女」に収録された二七編の短編童話の価値は、どう見てもそれほど高くは評価できないものばかりであらうが、前述した「はしがき」のように、晶子の童話は我が子に語って聞かせる目的で執筆された童話である。それらは人間の智慧やこころを教える人生訓が語られ、晶子の歌の世界ではけっして見られなかつたような、純粹で真摯な態度と、ほほえましい母親の愛情で満ち溢れた世界が、これらの短編童話の中に描かれているのである。しかし、このような中に一つだけ異質な作品がある。「うなぎ婆さん」という民話風な作品である。

この童話は、鰻取りの名人の婆さんが、自分が鰻ではないかと思うようになり、ふさぎ込むようになる。そして、しだいに自分は山の沼へ行って、底の藻の中で住むのだというような気がしてしかたがなくなる。ある時、息子の三八を呼び、「厄介になったが、今日かぎりで帰る」と言つて、親類の者を呼び集めさせ、御馳走し、その後沼のある山まで親類の者と上っていく。親類の者たちは、何のために集められたか不信だったが、長い間鰻を取つたが、今日限りそんな殺生はよすという祝いだらうと察した。しかし、婆さんは皆を前に「皆たっしゃでおいでよ、私は鰻だから水の中へ帰って行く、さよなら」といつて水の中に入って行った。あわてた親類達は、いくつかの方法で探したが、お婆さんの姿は見えなかつたという話である。

この「うなぎ婆さん」は、他の童話の中にあつて、例外的に異様な雰囲気漂い、一種の凄みのある作品で、注目される。胆々とした文章と、あまり脚色のない直線的な表現が、効果的に働

ている。

これより後の作品では、『名著複刻日本児童文学館』第二集に掲載されている「さくら草」、「月夜」等がある。「さくら草」は、以前の短編童話とは異なり、少女小説風な美しい作品で、随所に花の描写があり、詩的である。また、「月夜」は、石津村に住むお幸という不幸な少女の物語で、苦しい境遇の中で強く生きぬく少女の生き方を描いたもので、晶子自身の人生観をもオーバードラップさせているようでもあり、大変興味深く印象的である。

このように、晶子の多くの短編童話には、初期の頃の現実生活の中から生まれた生活話的な「語り」の童話から、「書く」意識が生まれ、小説風のものが生まれるようになったようである。晶子が元来持っていた短詩型文学の資質は、これらの短編童話にも多分に生かされ、構造的な長編よりは、主情主義の勝つた短編に、より優れたものを見い出すことができるように思われる。

三

次に、長編童話について考えてみよう。先述した五冊の単行本の他に、雑誌掲載の「環の一年」（大正元年一〜十二月迄「小年少女」に連載）、「おとり鳥」（大正二年、六〜七月）は長編童話である。

これらのうち、大正三年二月刊行の『八つの夜』（実業日本社刊）は、二百頁の長編童話で、彼女の童話中で最も完成された味わいのある童話と言つて良いだろう。八編から成る短編童話を集めた短編集と見るむきもあるようだが、この八編が一つの構想と主張を持つて連関しており、一つのまとまった長編と考えてよい。

話は、十二歳の少女綾子は誕生日より八日間、夕方になると神様に預けられる。一日目は按摩娘に、二日目は英学校の給費生、三日目は漁師の娘、四日目は外国航路の客室係に、五日目公爵令嬢、六日

目子守女、七日目肺病の少女、八日目おぼつかな姫と、様々な少女に変身して、違った世の中を体験するという童話である。この八日間の体験が、一夜毎に連鎖的に語られており、そのうち七日目には、肺病の少女井上順子が、鎌倉の転地先から自宅に帰り、一日目のお梶という按摩に再会するという手法を用いており、構成的に苦心の跡が見られる。

この『八つの夜』は、現実と夢とを交錯させて、一人の少女にそれぞれの幻想と実像を描き出しているのである。幻想は、晶子が歌の世界に描いてきた浪漫であり、また実像には、様々な階層・身分・境遇によって生ずる異なった生き方に対する彼女の人生訓がこめられている。そうした彼女の感性和奥深い英知と、そして自立の精神によってこの「八夜物語」は創り上げられたのではなからうか。

この作品について、瀬沼茂樹氏は、

「『八つの夜』は、近代的な八夜物語とみることができる。即ち、

極めて深く東西の伝統を踏まえて、古風であると同時に、前衛に近い新風をひらいたと見ることができよう。」

と述べており、晶子の学識を認め、この八夜物語を評価する。確かに、このような体験小説は、一般的には幻想的でメルヘンに終始するが、単にそれだけにはとられない晶子独自の童話となったのであろう。

この翌年の大正四年、九月に続いて長編童話『うねうね川』（啓成社刊）が出版される。『八つの夜』と比較すると、短編を繋ぎ合わせたような構成法は類似しているが、内容的には全く異質な作品である。内容は、うねうね川の上流に住む老夫婦が、九人の息子の家を訪ねて行く船旅の話で、この九人の息子達の生活や、老夫婦と息子のやりとりなどに人生の縮図を見るような想いがする。

しかし、一方ではこの『うねうね川』という作品は、不可思議な

部分が随所にある。例えば、この九人（執筆当時、晶子も四男五女の母親）の息子達への土産に、青蛙や、板昆布で作った靴や、猿などといったものを持って行くというのも、現実から掛け離れているし、時代設定も曖昧である。その上、数ヶ所に次のような非現実的な箇所がある。

「さうですね。お爺さん、まあ何年振でせうかねえ」

お婆さんも兩岸の樹木をとみかうみしながら云って居ました。

「何年になるかなあ。」

二人は同じように首を傾けて居ました。

「お爺さん、七八百年程でせうかねえ。」

「とんでもない、七八百年前というのはあの三番目の息子を分家させた時分だよ。」

「ほうさうですかなあ、では千年も経ちますかえ。」

このような記述は、他にも数ヶ所あり、このような記述から昔話かと思えば、非常に現実的な部分があったりと、不統一な雰囲気がある。最初から最後まで漂っている。一体、これは何を意図しているのだろうか。佐藤通雅氏は、この点に触れ、「つまり、この作品は語りなのか読み物なのか、昔話なのか現代話なのか、ファンタジーなのかリアルな作品なのか、すべての点であいまいな失敗作である。」と述べている。だが、「あいまいな失敗作」と断定するのは、性急すぎると思われる。

晶子の長男光氏の「母の想い出」（『太陽』昭和五三年二月）という随想の中に、この『うねうね川』について、「話の筋を子供の望みでどのようにも変えてくれた結果まとめられたものである。」と述べられている。つまり、この童話は、子供の枕辺で話して聞かせた晶

子流のお伽噺であつて、それぞれの場面ごとに、子供達の要求によつて、脚色されたり、飛躍があつたり、逆に現実的になつたりして、全体的には不統一にならざるを得なかつたのではなからうか。見方を変えれば、このような不可思議な雰囲氣こそが、この童話の一つの魅力とも言い得るのではなからうか。

また、九人の息子との再会と、その生活ぶりや事実を通して、老夫婦の生き方の潔癖さや、明かるさが描かれており、この辺にも晶子自身の人生観をみせているようでもある。

長編童話のすべてについて考察したのではないが、この代表的な作品二編は、それぞれ固有な特質を持つており、見方によつてはそれなりの価値と魅力はたぶん発揮されたものと評価してもよいように思われる。しかし、初期の頃の短編童話に見られるような、話題になつてゐる人や事件の特徴の一面を描いたような簡単な話の童話とは異なつて、長編童話には、晶子の一つの主張が浸透しているようでもある。

四

では、このような晶子の児童文学は、どのような役割を荷つたのだろうか。先にも触れたように、この明治末から大正初めの児童文学は、専門的に童話を書く作家は少なく、いわゆる一般の作家たちが、童話の分野にも手を染めた時代であつた。晶子もこの例にもれず、雑誌社の需要と生活のために童話を書くきっかけを得たのであるが、当時活躍した女流児童文学作家といつても、尾島菊子を掲げるくらいである。つまり、晶子が童話や少女小説を書いた時期は、大正の中頃に到来する児童文学のルネッサンスの前段階にあつて、「みだれ髪」において情熱のほとばしるような、奔放な愛の歌を読んだ歌人が、児童文学に傾倒した事実は児童文学史上の一つの大き

な布石を打つたものと考えてよいだろう。

次に、ここでとり上げなくてはならない問題に、大正七年八月、鈴木三重吉による「赤い鳥」運動と晶子の主張についてである。「赤い鳥」運動の主義や成果は、「明治期のお伽噺に見られる底の浅い説話性をより近代的な文学性に高めたこと、そしてそれらがもつ低俗な教訓性や娯楽性を払拭して、子ども心の特殊性に即した表現の質を深めたこと」⁽⁴⁾が大きな功績であつた。しかも、三重吉の主唱した児童芸術運動は、当時の文壇のそうそうたる作家達の賛同によつて、はなばなししい幕あけとなつた。しかし、晶子はこのような三重吉の運動に同調することなく、また三重吉も晶子の童話を評価することがなかつたようである。このことは、興味深い事実である。

この日本の近代児童文学の歴史を拓いた雑誌「赤い鳥」は、雑誌の内容が高尚すぎた点と、当時、一般の家庭の子供達に根を下ろすことがなかつたことと、三重吉自身に確固とした児童文学観が確立していなかつたことが原因として、広く大衆に受け入れることなく、三重吉の死で百九六冊を刊行して廃刊することになる。こうした、どことなくきどつた品格の童話や読物は、晶子には納得しかねる部分があつたことは大いに予測できる。晶子の童話の根源は、自らの母親としての子供らへの枕辺の語りから発想されているものであるし、何よりも対象となつた子供達への愛情と反応を起因として、綴られたものが晶子の児童文学であつたのである。こうした両者の主張があい受け入れられずに終つたのは、当然のことであつたのかも知れない。この頃を境として晶子の児童文学は、他のすぐれた作家の輩出によつて発表の機会を失うに失つていったようである。大正十一年以降は一編の作品も発表していない。

以上のように確かに、晶子の童話は彼女の短歌や詩にある精彩さには欠けるものがあるかも知れないが、ここに掲げた多くの作品の

いずれにも、清らかで、真摯な態度の晶子の姿がある。それは、くり返し述べることになるが、十一人の母親としての子供達へのやさしいぬくもりの愛情によって支えられていることに起因する。非現実的な描写や、幼稚な発想、作作的な構成は、語りの集成から生まれたために止むを得ず生じたものと考えられ得るし、論理的な思想は幼い子らには不必要なものであったかも知れないのだ。

また、この童話執筆時期は、晶子の私生活も多忙をきわめ、五男六女の出生、育児にあつて生活は貧窮し、物質的には恵まれない時期であつたらしい。しかし、このような生活の中にあつて、実生活への糧と、精神的自立のために晶子は数々の童話をしたためることになったのである。「明星」の代表的歌人として、また詩人、小説家、国文学研究者、さらに社会評論家、そしてここに述べてきた児童文学家としての活躍ぶりには、感嘆せざるを得ないのである。

注

(1) 『定本 與謝野晶子全集』第十二巻「童話 戯曲 美文他」木俣 修氏解説には、「『女子文壇』(明四一・二)の広告によると、これには『牛のおばさん』他二編が収められているのである。」とある。

(2) 上笙一郎氏は「晶子・その児童文化的側面(中)」(『日本児童文学』昭和五七年五月)、「三、童謡・少年少女詩」の中で「晶子の童謡・少年少女諸作品の少なからぬ数を、『童話・小説』欄に記載してしまつてゐるような有様では、その総数は不明と言ふよりほかはないのだが、」と述べられるように、私に確認した大正八年三月の「花子の目」などは、本来童謡の中に入れられるべきものである。

(3) 『日本児童文学館第二集』「与謝野晶子著 八つの夜(愛子叢書第四編)」解説(昭和五三年十一月・ほるぷ出版)。

(4) 『日本児童文学の成立序説』(昭和五六年十一月刊・大和書

房刊)。(5) 講座日本児童文学第四巻『日本児童文学史の展開』(昭和八年十二月刊)、所収の横谷輝氏「童話の成立とその展開過程——日本童話文学の歩み」参照。